

乗用茶園作業機導入の茶生産組合における生葉生産の実態

田中敏弘（鹿児島県茶業試験場）

Toshihiro TANAKA : Actual Situations of Green Tea Production on Group Farms using a Riding Track Type Working Machine

1. はじめに

現在、茶業経営において茶の消費減退に伴う供給過剰と農村部での若い労働力不足が問題化しつつあり、その解決策として生産費の引き下げと労働時間の削減が考えられ、有力な手段として機械化が期待されている。

鹿児島県の茶産地は、平坦部の割合が7割を占め大型機械導入に有利であるが、機械化を前提に区画整理、圃場整備がなされている茶園が少ない。

本稿では、知覧町で乗用茶園作業機を導入している西垂水茶生産組合（以下西垂水と略称）と菊永茶生産組合（以下菊永と略称）を調査し、基盤整備の不十分な平坦茶園へ当機導入の可能性を検討した。ここで、西垂水は基盤整備が不十分な地区であり、菊永は基盤整備が行われた地区である。

2. 調査方法と調査農家の概況

調査は霜害の影響の少なかった1981年に行い、調査方法は生産組合の共同作業については組合の出役簿、作業日誌、車輻日誌、茶園台帳により、農家の個別作業については農家の作業日誌、農家帳簿をもとに聞き取りで補完した。

調査農家は西垂水では89戸中10戸、菊永では37戸中6戸とした。調査農家の1戸当たり経営耕地面積は西垂水では304a、菊永では375a、1戸当たり栽植茶園面積は西垂水では254a、菊永では356aであった。茶園一圃場当たりの面積は西垂水では18.5a、菊永では41.2aで、特に西垂水の圃場区画が小さいことが目立った。

3. 調査結果

調査農家の作業方法としては、摘採（収穫）、整枝作業は両組合とも生産組合へ大部分を委託しており、西垂水では59%、菊永では96%が乗用茶摘採機で、残りは可搬摘採機で行われていた。また、農薬散布作業は農家個々の作業であり、西垂水では50%、菊永では94%が共有の乗用茶園防除機で、残りは動力噴霧機で行われていた。このように西垂水では菊永に比べ摘採、整枝、農薬散布作業で乗用茶園作業機の利用割合が低かった。施肥作業は両方とも年間13回ほど行われているが、施肥直後の中耕作業回数は菊永の13回ほどに比べ、西垂水では畦間に敷草がある茶園が多いため3回ほど行われているにすぎ

なかった。その他の作業については大差なかった。

生葉生産のための10a当たり投下労働時間は西垂水では96.9時間であり、菊永の87.2時間に比べ9.7時間長かった。西垂水では摘採、整枝、農薬散布作業が41.4時間で菊永より10.9時間長いことが両者の差として現れたものと考えられる。西垂水で摘採、整枝、農薬散布作業に多く時間を要したのは、菊永に比べ乗用茶園作業機の利用割合が低いことに加え、基盤整備が不十分であるため乗用茶園作業機の作業能率が劣っていることに起因しているものと考えられる。しかし、西垂水においても投下労働時間は鹿児島県値（農林統計生産費調査の値）153.0時間に比べ63%であった。

生葉10kg当たりの第一次生産費は西垂水では1,265円であり、菊永の1,155円に比べ110円多く要した。しかし、西垂水でも鹿児島県値の1,433円に比べると168円（12%）低かった。労働費、農具費を比較するため労働費の単価を鹿児島県値にそろえた労働費、農具費、組合への支払料を加算した。その結果、西垂水では鹿児島県値に比べ219円低く、労働費、農具費が節減されていた（第1表）。

組合所有の作業機、車輻は補助対象となっており、組合が自己資金で購入したとするなら鹿児島県値と比較するためには生葉10kg当たり30円ほどさらに加算する必要があるが、これを加えても西垂水は鹿児島県値に比べ有利であることがわかる。

第1表 生葉10kg当たり一次生産費（1981年）

項目	西垂水	菊永	鹿児島県値
組合への支払料	180.5	149.5	0.0
雇用労働費	2.1	16.8	34.4
農具費	109.1	101.8	172.9
家族労働費	224.8	168.0	528.3
その他	767.3	739.2	697.6
合計	1,283.8(89.6)	1,175.3(82.0)	1,433.2(100.0)

注) 鹿児島県値は農林統計生産費調査の値である。

以上のことから菊永のように基盤整備が行われた地区はもちろん、西垂水のように基盤整備が不十分な地区でも生産組合を組織し乗用茶園作業機を利用すれば、労働時間の削減と生産費の節減に効果あると考えられる。